

被災経験の違いが地震防災意識に及ぼす影響

群馬工業高等専門学校 学生会員 ○石関 圭太
 群馬工業高等専門学校 正会員 三上 卓
 三井共同建設コンサルタント(株) 正会員 原田 紹臣
 阿南工業高等専門学校 正会員 笹田 修司

1. はじめに

1995年には、戦後最悪の被害をもたらした兵庫県南部地震が発生し、近年では、2004年新潟県中越地震や2008年岩手・宮城内陸地震などといった被害を伴う地震が相次ぎ、人々の生活基盤や社会基盤が脅かされてきた。そのため、市町村などの地方自治体を中心となり、耐震診断や防災訓練などの地震防災対策が盛んに行われている。

本研究では、高等専門学校（以下高専とする）の学生に対し、地震防災意識の現状を調査するとともに、被災経験が地震防災意識にどのような影響を及ぼすかについて調査し、検討を行った。

2. 地震防災意識調査アンケート

高専の学生には、地震防災に関する意識や知識の有無、非常時の備えがどの程度あるのか現状を把握するため、表-1に示すアンケート項目を有するアンケートを実施した。

2.1 アンケート対象者と実施方法

地震防災意識調査アンケートは、表-2に示す本校4・5

年生72人を含む5校の高専生、計200名を対象者とした。

対象となる高専生は、1995年兵庫県南部地震により、幼少期に被災経験があると思われる兵庫県の明石高専5年生34名、2004年新潟県中越地震や2007年新潟県中越沖地震により、中学生や高専生時に被災経験があると思われる新潟県の長岡高専5年生37名、今後30年以内に発生する確率が50%とされている南海地震による被害が危惧されている和歌山県の和歌山高専5年生29名および徳島県の阿南高専4年生28名である。表-1に示す36項目を有するアンケートを10月15日から30日の間に、各高専の地震防災科目に携わる教員に協力して頂き実施した。

2.2 地震防災意識調査アンケートの調査結果

実施した地震防災意識調査アンケートについて単純集計、クロス集計、数量化Ⅱ類およびⅢ類による解析を行った。本稿では、単純集計の結果を示す。

2.2.1 地震災害に対する意識（不安）

図-1は、「地震災害に対して不安を感じるか」の問いに関する回答結果の割合を高専別に示した図である。明石高

表-1 アンケート項目の分類

分類名	アンケート項目	分類名	アンケート項目
実体験	揺れの経験	意識	地震への不安
模 擬 体 験	起震車の体験	コミュニティ	ご近所づきあいの有無
	消火器の体験	未分類	災害用伝言ダイヤルの認知
	防災訓練の参加		災害用伝言板の認知
	防災センターの体験		マイコンメーターの認知
備 え	地震災害に対する備え	訓練	輻輳の認知
	家族間の共通避難場所		緊急地震速報の認知
訓 練	D I Gの体験		避難訓練の必要性、効果
	タウンウォッチングの体験		避難訓練の改善の必要性
	ハザードマップの認知	知識	家族間の連絡方法
知 識	避難場所の知識、認知		震災対策をしない理由
	地震防災関連のTVの視聴		地震防災対策を意識するきっかけ
	地震防災関連の書籍の閲覧		校内で地震時に危険と思う場所
	講演会への参加	その他	通学方法・住所 性別・学年

表-2 アンケート対象とした高専生

高専名	所在地	学 年	人 数	実施期間
明 石	兵 庫	5	34	10月26日
長 岡	新 潟	5	37	10月26～28日
和歌山	和歌山	5	29	10月30日
阿 南	徳 島	4	28	10月21日
群 馬	群 馬	4・5	72	10月15～19日
合 計			200	

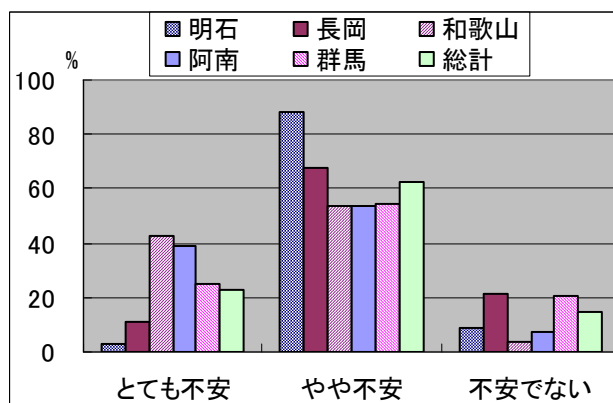


図-1 地震災害に対する不安の割合

キーワード: 地震防災, 防災意識, 被災経験, アンケート調査

連絡先: 〒371-8530 群馬県前橋市鳥羽町 580 群馬高専環境都市工学科 E-mail: mikami@cvt.gunma-ct.ac.jp

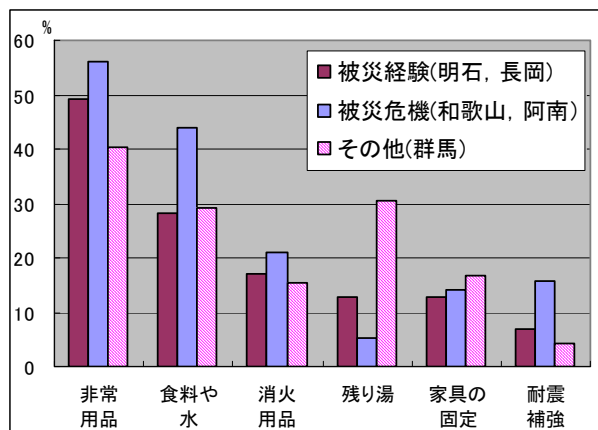


図-2 自宅で行っている備えの割合

専の学生は、『とても不安』と感じている割合は、3%とわずかであるのに対し、『やや不安』と感じている割合が88%である。長岡高専の学生もそれぞれ11%、68%と同様な結果を示している。和歌山高専および阿南高専の学生は、『とても不安』と感じている割合が、それぞれ43%、39%であるのに対し、『やや不安』と感じている割合は54%となっている。アンケート実施前は、明石高専および長岡高専の学生は、『とても不安』と感じる割合が多くなると考えていたが、図-1の結果は、兵庫県南部地震や新潟県中越地震を間近で経験もしくは見聞きし、災害の甚大さを感じているものの、地震時の被害や内容、対策を身を以って体験していることから、不安感が高くないのではないかと推測される。和歌山高専および阿南高専の学生は、今後30年以内に発生する確率が50%である南海地震による津波被害などの被害予測の公開やそれに対する津波避難訓練が実施されていることで地震災害に対する不安感が増大していると考えられる。

2.2.2 地震災害に対する備え

本アンケートでは、地震災害に対する備えとして、非常用品の備蓄、貴重品の確認、非常用食料や水の備蓄、初期消火用品の備蓄、非常用生活水としての残り湯の準備、家具の固定やガラス飛散防止シート等の対策、防災マップやハザードマップの閲覧、避難場所や避難ルートへの認識、地域の防災活動や学校の防災訓練への参加、耐震診断や耐震補強の実施の11項目について調査した。図-2は、調査した中でも特徴的な傾向がある備えの割合を被災経験の違う高専ごとに示したものである。和歌山高専および阿南高専の学生の備えは、非常用品の備蓄、食料や水の備蓄、消火用品の備蓄、耐震補強や耐震診断を行っている割合は、他の高専より4%~16%高いことから、前述した今後起こりうる地震被害に対し、備えを積極的に行っていることがわかる。群馬高専の学生は、前日の風呂の残り湯を翌日まで保持する備えが31%と群を抜いて高かった理由として、アンケート実施前日に、被災経験のある明石高専教員による講演会で、風呂の残り湯の

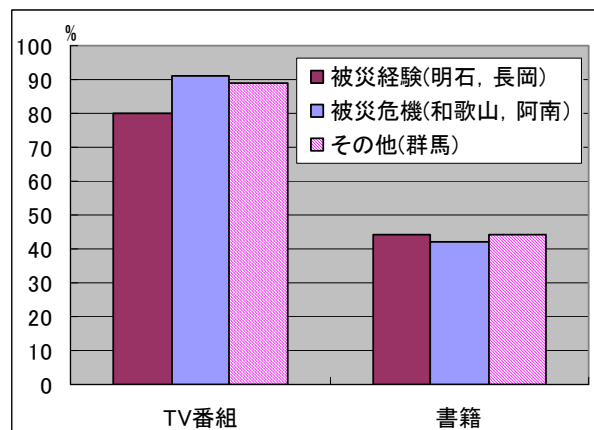


図-3 地震防災に関する知識が有る人の割合

備えの重要性を直接聞いたためと考えられる。

2.2.3 地震災害に対する知識

図-3は、地震防災関連のTV番組の視聴経験や書籍の閲覧経験がある学生の割合を示したものである。TV番組を視聴経験がある学生の割合は、被災経験に関わらず8割を超え、書籍の閲覧については、約4割程度であることがわかる。TV番組は、放映されているものを偶然見ることが可能だが、書籍は、自らの意思で閲覧する必要があるため、このような結果となったと推測される。被災経験の違いにより、知識に差が出ないのは意外であった。

3. おわりに

本研究では、被災経験の違いにより地震防災意識にどのように影響し、どのような差異が生じるのかを調査するため地震防災意識調査アンケートを行った。アンケート結果から、被災経験のある高専の学生は、『とても不安』と感じる割合が少なく、『やや不安』と感じる割合が多い。一方、被災危機がある高専の学生は、『とても不安』と感じる割合が多い結果であるため、被災経験が影響することがわかった。

群馬高専では、講演会が実施されたため、残り湯を翌日まで保持する備えが高い結果が得られた。このことから、被災経験がある講演者のアドバイスは、備えを高める効果が高いと考えられ、事前に聴衆者の防災意識の低い部分に対し調査を行い、不足している知識や備え等を把握し、効果的な講演会を行なうこと、同じ講演内容ではなく各々の被災経験に合わせた内容にすることが必要であると考えられる。

謝辞

本研究のアンケートの実施に関し、長岡高専塩野計司教授、和歌山高専辻原治教授、明石高専江口忠臣准教授にご協力して頂いた。ここに記し、感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 内田治：すぐわかる EXCEL によるアンケート調査・集計・解析、東京図書、1998。